
第9回愛媛形成外科研修会

抄 録 集

日 時 平成14年6月8日(土) 18時～
場 所 国立病院四国がんセンター
外来4階会議室
当番世話人 愛媛大学医学部附属病院
形成外科診療班 中岡 啓喜

研修会プログラム

SECTION 1 1～4 (18:00～18:40)

座長 森戸 浩明先生

1. 開頭術後変形に対するバイオペックの使用経験

愛媛県立中央病院形成外科、おがた形成外科
○石原博史、小林一夫、緒方茂寛、吉田和代、槇野祥生、中島光子

術後の前頭から側頭に渡る凹凸のある頭蓋変形は目立つ。変形の程度により自家組織や人工物が選択され充填されてきた。今回、バイオペックを使用する機会があったので報告する。

2. 鼻咽腔閉鎖不全に咽頭形成術を行った1例

愛媛県立中央病院形成外科、おがた形成外科
○吉田和代、小林一夫、緒方茂寛、石原博史、中島光子、槇野祥生

症例は10歳、唇口蓋裂患者。1歳時に口蓋形成術、6歳時に咽頭弁形成術を施行され言語訓練を受けた。しかし開鼻性構音障害が続き、スピーチエイドを使用した訓練が必要と判断され、鼻咽腔閉鎖運動の改善を図った。患者はスピーチエイドを使用することに抵抗感があり、今回、咽頭形成術とFurlow法による軟口蓋の延長を図ったので報告する。

3. 最近経験した無色素性基底細胞癌の4例

愛媛大学医学部附属病院 形成外科診療班
○戸澤麻美、中岡啓喜、森 秀樹、一色恵美、大塚 壽

症例1：53歳女性、日本人。10年前より左鼻翼基部に常色～赤色丘疹あり、徐々に増大。症例2：58歳男性、スペイン人。4年前より左頬部に痂皮化、潰瘍化を繰り返す。症例3：72歳女性、日本人。1ヶ月前より左上口唇の常色結節に気付く。症例4：77歳女性、日本人。1年前より左上口唇に血痂を伴うドーム状に隆起する赤色結節あり。非典型的なBCCと思われたので報告する。

4. 超弾性ワイヤーを用いた巻き爪治療の経験（3分）

愛媛労災病院形成外科
○黒住 望、遠所瑞拡

巻き爪は整容上の問題のみならず、疼痛、陥入爪の原因ともなる。巻き爪の治療に関する報告は少ないが、爪床の形成術を行う方法が主流である。しかし、この方法は患者にかなりの負担を強いる。今回、われわれは、簡便な超弾性ワイヤーを用いた爪甲の矯正を数症例で試みた。本法の形成外科領域での報告は少ないが、若干の考察を加え報告したい。



SECTION 2 5～8 (18:40～19:20)

座長 森 秀樹先生

5. 眼球摘出を伴う左上顎癌術後に義眼床形成を行った1例

愛媛大学医学部附属病院 形成外科診療班
○一色恵美、中岡啓喜、森 秀樹、戸澤麻美、大塚 壽

51歳、女性。左上顎癌に対する左上顎・眼窩内容摘出術・左上頸部郭清術による眼窩～口蓋の連続する欠損修復目的に当科を紹介された。平成12年4月、遊離腹直筋皮弁による左眼窩部・頬部・口蓋部再建を行い、平成13年1月、遊離皮膚移植による義眼床形成を行った。その後、義眼床拘縮を来し、平成13年10月、耳介皮膚軟骨複合移植による上下眼瞼形成を伴う義眼床再形成術を行った。現在義眼の装着状態は良好である。

6. 植皮の tie over ー綿花とテトロンー

松山市民病院形成外科
○向井知子、手塚 敬

当院では植皮の状況によって吸水性の綿花、非吸水性のテトロンを使い分けて tie over を行っている。当院での使用方法を紹介し、他の先生方にも意見を伺いたい。

7. Folliculosebaceous cystic hamartoma(FSCH)の1例

十全総合病院形成外科¹⁾、徳島大学医学部附属病院形成外科²⁾

徳島大学医学部皮膚科³⁾

○松尾伸二¹⁾、中西秀樹²⁾、滝脇弘嗣³⁾

11歳男子。6年前より下顎部に皮膚腫瘍出現。病理診断はFSCHであった。FSCHは、1991年木村らが報告した過誤腫である。若年者に発生した例は稀と考える。

8. 若年者に発生した軟部腫瘍の1例

愛媛大学医学部附属病院 形成外科診療班¹⁾

県立新居浜病院 皮膚科²⁾

○森 秀樹¹⁾、中岡啓喜¹⁾、大塚 壽¹⁾、井伊真由美²⁾

16歳、女性。3歳頃より左上腕内側に腫瘤を認めていたが近医で経過観察されていた。年齢とともに徐々に増大してきたため当科受診。初診時左上腕内側に5×6cm大の弾性硬、可動性良好な腫瘍を認めた。摘出標本の病理組織検査では線維肉腫が疑われたため、後日拡大切除、腋窩郭清術を行った。

愛媛形成外科研修会総会 (19:20~19:30)

司会 中岡 啓喜

SECTION 3 9～11 (19:30～20:20)

座長 野澤 竜太先生

9. CUSA を用いた乳腺腫瘍切除

四国がんセンター形成外科
○河村 進、山田 潔

CUSA (Cavitron ultrasonic surgical aspirator) は、安全で選択的、かつ正確な組織切除ができることより、神経外科手術や一般外科手術で頻用されている。その特徴として、神経血管が同定でき、近接組織への障害が少なく、癒痕形成も少ないことが挙げられる。我々は、乳腺の良性腫瘍疾患に CUSA を用いており、良好な術後経過を得ているので報告する。

10. 外陰部アポクリン腺癌の 1 例

四国がんセンター形成外科
○山田 潔、河村 進

汗腺癌の進行期症例に対する有効な化学療法は限られており、その報告についても散発的に見られる程度であるのが現状である。我々は、対側リンパ節転移、骨転移を有する stageIV の外陰部アポクリン腺癌の症例に対して減量手術と所属リンパ節廓清および術後化学療法 (Epirubicin、Vincristine、Carboplatin、5-FU の 4 剤併用) を行い、転移リンパ節の縮小を見た症例を経験したので報告する。

11. 眼瞼部BCC（基底細胞癌）の4例

済生会今治病院形成外科¹⁾

愛媛大学医学部附属病院 形成外科診療班²⁾

○野澤竜太¹⁾、大塚 壽²⁾

上眼瞼1例、下眼瞼3例のBCCに対し頬部皮弁による再建を行ったので報告する。

症例検討 (20:00~20:20)